

第三部 言葉の時間形態～想起・約束・現在～

A. 想起としての説教

B. 約束としての説教

C. 現臨者の説教

17章 現臨の多様性

【主題】

想起せられた方（A）、そして約束されておられる方（B）は、さまざまな仕方で現臨される。いずれの仕方で現臨も彼の現臨にほかならず、彼の現臨として語らねばならない。だが、いずれも多くのものの中のひとつの現臨の姿でしかない。

18章 つなぐことととくこと

【主題】

来たりつつある救い手であり審判者である方にふさわしい言葉とは、自分が語ることを実行する言葉、すなわち、つなぎ、また解く言葉である。来たりつつある方の現臨を説教するということは、悪魔を追いはらうということであり、救いを求めて呼ぶことなのである。

※どうして、「つなぐことととくこと」が「C. 現臨者の説教」でテーマとなり、論述されるのか？

—現臨者が救い手であり審判者である方（つなぎとく方）であり、その方の現臨が説教で起こるから。

第17章 現臨の多様性 I 節 前提・霊の現臨 p

霊の現臨の中で、信仰は「見ることを学ぶ」（第27章Ⅱ節¹⁾）

「見る」ということの中で、キリストによって引き起こされる一種の神律的相互作用が起こる。つまり、ご自身について語られること（説教）によって現臨し、御自身を臨在せしめる。

¹ 第27章「聴衆への道」第Ⅱ節「見るということ」

第I節 説教の標準語（厳かな言葉）

標準語(Hochsprache)

P540 に現れる言葉。（高みにある言葉、厳かな言葉をも意味していると思われる）訳注 80

Hochsprache というのは、標準語を意味する。方言とは違う、文章用、もしくは舞台用語としてのドイツ語でもある。高地ドイツ語などと訳されるように、低地、即ち北部ドイツ語との対比で用いられることもある。しかしここでは、それだけでなく、日常の方言でなされる言葉とは区別された、改まった、いささかいかめしい言葉のこのようである。そこで、一応、「**厳かな言葉**」と訳した。これは、日常、方言を語るのが、どこでも殆ど通例のことであり、標準語はそれほど日常化していないドイツでこそ言い得る表現。そういう意味で、「高い hoch 言葉」と著者は言う。

㊦ 「あなたの罪はゆるされた！」

—「わたしはあなたの罪を赦す Ego te absolve!²」

- この文章を語ることにより、説教者は生命を賭ける、つまり、聴衆と自分の救いを賭ける。危険度も最高。御名が行動されるから。御名をもって呼ばれる方が働かれる事こそ、一切の説教行為の目標。この短い言葉に福音主義的説教の福音的なものが凝縮。
- 我々が説教する御名が、「聖なる法」を打ちたて実現するということを明かにせねばならない。つまり、説教する者は、つなぎ、また解くのである。説教者には、「説教者は究極的なことを語っている」という約束が与えられているから。この「究極的なこと」は、説教者の外から与えられるもの。



「つなぎまた解くこと」について、「とくこと」つまり「罪のゆるし（赦免:Abusolution）」に集中して語る。この「赦免」ということの中に、聴衆にとっての福音が集中しているから（第21章第II節二項³）。福音そのものが罪のゆるしとして示される。

² 訳注 79 告解における赦免(abusolutio)の言葉であることは、本文でも、後述で改めて指摘した通り。この第18章全体で問題にされる罪の赦しの具体的な場所として、福音主義教会においても、告解の意味が真剣に問われたことを、日本の説教者もまた新たに自覚すべきであると思う。

³ 第21章 黙想について 第II節 黙想の実践のための諸帰結 二項 罪の赦しについての喜び

80 罪の赦しの説教について

- ルター「福音は罪のゆるし以外の何ものでもない」
 - ☆ 「罪のゆるしは福音の説教以外の何ものでもない」

⇔

- トマス・アキナス

説教を通じて聴衆に内的、具体的恵みが告げられる事はなく、説教は人間を恵みを受けるべく備えさせるもの。恵の生命に達する切っ掛けでしかない。

※現代では、カトリック神学でも「説教の救済効果」について論じられるようになっている。

- ヨハン・クリストフ・ブルームハルト

「宗教改革の精神ということに関しては言えば、我々はそれ以上のものを必要としています。それ以外のものは何ひとつ必要ないのですが、それ以上のものは必要なのです。…ほとんどすべての教義には、その全面的な解明が欠けているのです。多くの教義は全く正しく固定化されるに至っていないのです。たとえば、**鍵の職務**がそうです。」**鍵の職務**については、宗教改革以上に体系だてて考察され、確定されることが必要だ、と言っている。つまり、**鍵の職務**について、曖昧である、ということ。



80 「鍵の職務」という教えの「全面的解明」

- 根拠となるテキスト

(1) ペテロに与えられた主イエスの言葉

「わたしはあなたに天国の鍵を授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」
(マタイ 16・19)。

(2) これに相応する弟子たちに与えられた「つなぐことと解くこと」についての言葉

イエスの名によって集まった者たちの中にイエスがいてくださる、との現臨の約束。(マタイ 18・19 以下)。

(3) ヨハネ福音書では、聖霊を与えられた後、約束された。

「あなたがたが許す罪は、だれの罪でも許され、あなたがたが許さずにおく罪は、そのまま残るであろう」(ヨハネ福音書 20・23)。



「つなぐことと解くこと」と「許すことと許さぬこと」は、それぞれの箇所違った意味を持つ？

—マタイ 16・19 悪魔祓いのこと、ラビたちの教義的判断が想起

—ヨハネ福音書 20・23 罪が赦されること、赦されないこと

このように様々に理解できるため、鍵の職務についての考察を展開しようとするなら、一直線に単純化できない。鍵の職務の様々な機能を取り出す作業をしてから、共通の分母を見いだす努力が必要。

㊦ 説教を罪の赦しそのものと同定できるのか？

ヴィルター・ウーザデル⁴ ルターの言葉を引用しつつ、「説教と赦免がいっしょくたにされている」「立派なルター主義者は、説教が赦免でないことを承知している」。

だが、彼は次のことを考えていなかった。

- ① 十字架上のイエスが、全ての人に及ぶ恩赦、すべての人の罪の赦しを獲得された、つまり、罪のあらゆる認識に先行する赦免が行なわれている、ということ。
- ② 説教というのは、教義学がするような一般的な仕方で、罪の赦しを説明するわけではなく、寧ろ、罪のゆるしそのものを語りかけねばならないということだ。

㊦ 説教において起こる罪の赦し

罪の赦免において、現在の時は、その頂点に達する。説教もまた、

⁴ ヴァルター・ウーザデル 詳細不明

罪の赦しにおいて、高みに至る。

説教において罪の赦しを語りかけることの中で、わたしやわたしの聴衆の過去と将来に対して、キリストとその現臨が、その正当性を獲得し確保する。

罪の赦しは、私たちの過去に対する霊の現臨を正当なものとする。悪しき時から私を連れ出し、新しい時の中においてくれる。罪の赦しを受けとった時、私たちの過去は正当な意味を持つようになり、そのことによって、過去は過去となり、私の「今」が変えられる。

そこでは、罪人が十字架と対面する出来事が起こる。霊によって十字架の出来事が想起され、その十字架の出来事が現実の現実に現在のものとなり、また、その過去ともなる。

同時に、霊は将来をも先取する。霊において説教で語られる赦免の言葉は、来りつつあるキリストの言葉として語られる。来たりつつあるキリストの言葉により将来を先取りし、将来が与えられることで、罪人の過去は消滅させられる。こうして、説教の最高の形態として、罪の赦しが起こる。**罪の赦しの中に、想起と約束が凝縮している。**

→

80 説教に起こる罪の赦しは、「祭りの儀式」という特質を持つ。罪の赦しを祝う祭り。

- そこでは、究極的なものは、説教者から「滑り落ちる」。それによって、「自分の情熱によって罪の赦しを発効させようという偽りの儀式、横領」となることから免れる。
 - 説教にとって正当な祭りの儀式は、説教者が罪の赦しを自分自身の実存によって証言することにより、説教の内容となっておられるお方が、御自身の現臨をもってこれを満たしてくださるので、空しく虚ろな者にはなり得ないようなもの。
-

80 罪の赦免を語る説教の言葉と語り方

➤ オイゲン・ローゼンシュトック・ヒュッシー⁵

「その真実の頂点にとどまる言葉は、常に厳粛なものである。高度の真理は標準語⁶(高みにある言葉、厳かな言葉をも意味していると思われる)で、声高く語らねばならない。日常の会話や、教師と生徒との間の対話の、おしゃべりに落ちることはがまんでできない(『言語の冒険に帰ろう』より)。この言葉が、説教者に理解されれば、御名の栄光を損なうような独善的で飾り立てた言葉を語らぬよう守ってくれるだろう。

➤ 説教の内容となっておられる方御自身が、「あなたの罪は赦された」という言葉に、御自身の持つ永遠性の重みを分け与えてくださるからこそ、一種の重々しい語り方が要求される。

➤ 真実の熱情は、自分が語ることをよく弁えており、「滑り落ちていく言葉」に約束として与えられているものについての知識をもって、滑り止めとする。

➤ 語り方はその言葉にふさわしくあるべきであり、語り手は自分が語っていることが何かをよく考え、語り方の高さを保ち、祭りの儀式にふさわしく、厳かに語る。罪の赦しの事柄に即してふさわしい語り方。

➤ 厳かな言葉が、その値打ちを保つのは、適用においてつつましく、事柄に即して使用され、必要不可欠なことにのみ限定

⁵ オイゲン・ローゼンシュトック・ヒュッシー 1888 年、ベルリンの裕福なユダヤ人家庭に生まれる。十代でキリスト教に改宗。ハイデルベルク大学で法学を学び、1912 年よりライプツィヒ大学私講師。第一次世界大戦に従軍したのち、ダイムラー・モトローレン社に就職。このころ、フランツ・ローゼンツヴァイクらと親交を結び、1919 年には出版社パトモスを設立、雑誌『被造物』を刊行。1921 年、フランクフルトで労働アカデミーを設立し成人教育事業に取り組む。1923 年よりブレスラウ大学ドイツ法教授。1933 年、ヒトラーが政権を掌握するとアメリカに亡命。ハーバード大学を経て 1935 年よりダートマス・カレッジ社会哲学教授。引退後も同地に留まり、1973 年死去。著書に『ヨーロッパの革命』、『社会学』、『人類の言語』などがある。

⁶ Hochsprache というのは、標準語を意味する。方言とは違う、文章用、もしくは舞台用語としてのドイツ語でもある。高地ドイツ語などと訳されるように、低地、即ち北部ドイツ語との対比で用いられることもある。しかしここでは、それだけでなく、日常の方言でなされる言葉とは区別された、改まった、いささかいかめしい言葉のここのようである。そこで、一応、「厳かな言葉」と訳した。これは、日常、方言を語るのが、どこでも殆ど通例のことであり、標準語はそれほど日常化していないドイツでこそ言い得る表現。そういう意味で、「高い hoch 言葉」と著者は言う。

されて、異例な言葉であり続けるときのみ。この異例なものがあたりまえのことになれば、説教の厳かな言葉は、説教壇通例の熱弁となり、壮大な言葉の使用過多となり、余計な文章、空虚な形式的教えへと転化する。

80 「厳かな言葉」の問題性

- ① すべての言語が、この「つなぐこと、と、とくこと」に向かう途上にある。文学においても、つながれ、解かれる。

例1) ボブロヴスキーの小説『レヴィンの水車』(12章Ⅱ節)

例2) ユーモアの持つ「解く」という特性(14章Ⅴ節)

「つなぎ、解くこと」は、説教以外では、間接的に、他の名によっておこる。が、説教においては、「つなぎ、解くこと」が、直接に、神の御名によっておこらねばならない。ただ、文学を参照することで、厳かな言葉を軽率に扱うことを免れる。このように、この「厳かな言葉」は、それを語る者には、「困難な言葉」なのだ(問題①)。

- ② その職務に基づき、使命に従って述べられる言葉としての「厳かな言葉」は、引用を用いることを好む(第11章参照⁷⁾)。実例:ハンス・ヴァルター・ヴォルフ イザヤ書43章1～7節に関する説教の一部。

説教が語る厳かな言葉とは、テキストに関係がある。テキストを語ることによって、そうした厳かな言葉となる。しかし、語るのは、わたしでなくてはならない。わたしが誰かを解く定まった言葉が、わたしをみ言葉と聴衆に結びつける。そうでなければ、「厳かな言葉」は、虚しい決まり文句となる。わたしがテキストや、“定まった表現”の中に身を隠すことはできず、それは許されない。寧ろ、そうした定まった言葉とテキストを自ら保証し、責任を負わねばならない(問題②)。

⁷ 第11章 説教と引用

㊦ 「厳かな言葉」の基となるもの

- この厳かな言葉を失えば、説教者は言葉を失う。この「厳かな言葉」が沈黙すれば、まさしく“ちんぷんかんぷん”な言葉だけが語られることになる（第2章 困惑 第I節 神との関わりで知る困難 参照）。
- このような言語喪失は、使命の喪失を示す。厳かな言葉は、その使命に依存し、その調子の高さは、使命を与えてくださるお方の高さに依存。「厳かな言葉」は、使命として与えられた言葉。その使命が、語り手をみ言葉に仕える者とする。
- このような言葉は、上から下へと向かって語りかけるものではなく、**寧ろ、自らが深みにあって学び取らねばならないもの。**第三イザヤの言葉「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕ける者の心を生かす』」（イザヤ書57・15）。
- この厳かな言葉は、心砕けて、へりくだる者の言葉として規定しうる。そうであるなら、異例のものを当たり前のものとすることなく、言葉多きことを大切にすることはないだろう（第21章Ⅲ節参照⁸）。この厳かな[高き]言葉の語り手の特質は、謙遜に他ならない。

「我々が入手しうる唯一の知恵は、謙遜の知恵。謙遜であることに終わりはない」（T.S.エリオット⁹）。

（結論）

⁸ 第21章 黙想について Ⅲ節 現代の芸術と黙想

⁹ T.S.エリオット（トーマス・スターンズ・エリオット 英: Thomas Stearns Eliot、1888年9月26日 - 1965年1月4日）は、アメリカ合衆国出身のイギリスの詩人・文芸批評家。

5部からなる長詩『荒地』や詩劇『寺院の殺人』によって20世紀前半の英語圏で最も重要な詩人の1人と評されるほか、創作における歴史的伝統の意味を論じた「伝統と個人の才能」などの評論で批評家・保守派文人として欧米の文壇・言論に巨大な影響を残した。1948年、ノーベル文学賞受賞。

厳かな言葉を語るためにへりくだり、
心碎かれる者は、
霊の内在ゆえに語りうるようになる。
その言葉は、いと高き方が現臨くださるがゆえ
に、その高さを保つ。
この厳かな言葉とは、高く挙げられた方の霊に
よって靈感を受けた言葉、へりくだり、心碎か
れた者の言葉。